

## 論 文

郁達夫の「左翼化」問題に関する考察<sup>1</sup>

李 麗 君

現代社会学部・社会システム学科

## 1 社会的政治批判意識の高揚

## はじめに

近代中国小説家郁達夫（1896－1945）の個人史の中で、1920年代後半、特に1927年前後の「蒋介石批判」や左翼文芸への急速な接近に示された「左翼化」傾向は、一つ大きな出来事に違いない。その出来事をめぐって、いくつかの見解が出されてはいるが、大いに検討すべき課題も残されている<sup>2</sup>。

1920年代中期以降、郁達夫は、それまでと違って、中国の社会的情勢、政治的情勢に強い関心を持ち、さらにそれに対して絶えず発言し、自分の態度を表明するようになった。その中において、特に1927年前後の「国民革命」批判、「蒋介石批判」が、激しい論争を引き起こすほどの反響を呼び、彼の生涯における大きな「事件」の一つとなった。

自由な人生を求め、感傷的な作品で名の高い小説家郁達夫の社会的意識や政治的意識はどのようなものなのか、それらはどのように変化してきたのかを考察する論文のほとんどは、共産党革命への態度と対応という枠の中で考察対象を判断したり論じたりしており、硬直した面が随所に存在していると言える。1927年頃の郁達夫の「蒋介石批判」をはじめとした一連の「左翼」的とも見える行動に対する論評はまさしくそうした考え方、論じ方を端的に表していると思う。

本稿で考えてみたいのは、郁達夫のこうした「左翼傾向」は単にイデオロギーによって解釈されるべきものでもないということである。言い換えれば、彼の「蒋介石批判」に代表される変化は実は「三民主義」反対、共産主義接近に直結するような単純なものではなく、それを「革命的」と「反動的」、「進歩」と「退歩」といった「基準」だけで判断することにも疑問を感じる。そのため、なるべく柔軟な発想で郁達夫の「左翼化」の由来や構造を明らかにし、その本来の姿に近づこうとするのが本稿の主な目的である。

郁達夫の生きた時代、中国では、軍閥政権乱立、内戦頻発、列強による侵略など、苦難に満ちた時代が長く続いており、安定し統一した国民国家がほとんど形成されていなかった。1949年以後と違って、この時代では、共産主義的な思想は、まだ社会の主流的な思潮でも国家のイデオロギーでもなかったことが、この時代の郁達夫の左翼化を理解する重要なポイントと背景である。

郁達夫の文筆活動は、1920年代半ば頃までは、自らの実生活や心境表現を中心とした文学創作や文芸問題についての発言がそのほとんどであった。彼の「還郷記」（1923.7）、「還郷後記」（1923.8）、「蘇州煙雨記」（1923.9）、「一封信」（1924.1）、「北国的微音」（1924.3）、「零余者の自覚」（1924.6）、「給沫若的旧信」（1926.3）などの一連の作品には、社会的不安、不遇の様子、物質生活の困窮、個人の精神的苛立ちの訴えや叫びが作品の基調となっており、それが極めて感傷的絶望的かつ自暴自棄的な調子で「展示」され、情緒性にあふれ、「頹廢」とも評される郁達夫の作家像を示しているのである。

20年代後半から、文壇情勢、及びそれをとりまく社会全体の情勢が大きく変わり始め、それに伴って、彼の文筆活動にも変化が現われてきた。当時ソビエト文学、特に日本のプロレタリア文学運動からの影響を受け、いわゆる「プロレタリア文学」（「革命文学」）運動が蔣光慈（1901－1931）を中心とした「太陽社」、及び郭沫若（1892－1978）をリーダーとした創造社によって盛んに提唱された。1928、29年までにそれはさらに活性化し、激しい論争にまで発展してきた。この革命文学運動の影響によって、文学・文壇に止まらず、革命意識、革命文学意識が文芸界に広く浸透し、いわゆる「プロレタリア革命」時代の雰囲気醸成されるようになった。その一つの証左として、1928年以後の、文学に止まらず、思想、政治、経済など、さまざまな角度からマルクス主義や共産主義を論じる社会科学書籍の盛んな翻訳・出版が挙げられる。君素「1929年中国關於社会科

学的翻訳界」(1930.1『新思潮月刊』第2～3合併号)によると、その年、シリーズものを除いた単行本だけでも、160種類以上が出版されているという。

社会政治的な面では、1925年7月、国民党は広州で汪精衛(1883～1944)を主席とした「国民政府」を樹立し、「中華民国国民政府宣言」を發表し、国民政府の責務、国民革命の目的を「中国の独立、平等、自由に努める」ことにあるとした。1926年7月から、北方にある北洋軍閥及びその支配下の「北京政府」を倒し、中国を統一するための「北伐戦争」(「国民革命」とも呼ばれる)を始める。1927年4月、蒋介石をはじめとした国民党右派が共産党勢力への弾圧を敢行し、同月18日、広州から武漢に移った国民政府に対抗しようとして、別に南京で国民政府を樹立した。蒋介石は北伐戦争に勝利を収めた後、国民党内部の争いにも優位を占め、1928年頃に反対勢力を抑えて、権力を自らに集中させることに成功した。これにより、形式上一応全国を統治する政府が成立したのである<sup>3</sup>。

そうした文学界、思想界、教育界、出版界に渦巻いた時代的潮流の刺激を受けて、郁達夫の社会情勢、政治情勢に対する関心は急速に高まった。1926年、彼は中山大学赴任のため、「(国民)革命発祥地の広州にやってきて」、「そこで古い習性を改め、すべての情熱と鬱憤を革命に注ぎ込もうとしたが」<sup>4</sup>、「国民革命」における様々な現象や問題点を目にし、不満を覚えることになった。こうして、それまでの社会の混迷や個人生活の困窮に対する漠然とした不満を漏らすのとは違って、かつてない鮮明な批判意識をもって、政局への批評・批判を積極的かつ大胆に行うようになったのである。

## 2 「国民革命批判」の展開

その中で、特に人々を驚かせたのは、当時たいへん盛り上がりを見せた「北洋軍閥政府」打倒を目指す「国民革命」に対して強い不満と批判を大胆に述べたことであろう。1927年2月、郁達夫は「無産階級専政と無産階級の文学」という強烈な「左翼的」色彩のある論文を發表し、「国民革命」の本質に疑問を投げかけている。

中国では古来より、封建的帝王制度が長く続き、全ての民衆はただ一人のために犠牲を払ってきたが、少数の人が民衆のためにあえて犠牲になろうとしたことは見たこともない。辛亥革命は帝政を終わらせ、なんとかいくらかの利益を得た者を出したが、しかし、四

億という人数と比べれば、この一握りの革命投機者はやはりほんの少数なのだ。その結果、この数人が外国の資本主義者と結びつき、目下の軍閥官僚と外国資本家による独裁の局面となってしまったのである。

……………

現在の中国では、政治的権力を握る人物も軍事的権力を握る人物も、大抵、多くは前期資本主義の訓練を受けた小ブルジョア出身の者なのだ。彼らは民衆を利用しようとした時、非常に立派な言葉を用いて、彼らよりもっと実力のある旧階級を倒そうとする。しかし、もしも成功したら、あるいは半ばまでしか成功しなかったら、彼らの根性がすぐ現われ、大多数の民衆に圧迫を加えることになるだろう<sup>5</sup>。(下線は引用者による)

それまでに繰り返された「革命」への失望感があまりに大きかったためか、郁達夫は今回の「国民革命」に対しても最初から不信感を持った。彼の目には、今日の蒋介石をはじめとした国民党の権力者たちは明らかに北洋軍閥と同じような「根性」を有しており、革命が成功したとしても民衆に圧迫を加えることに変わりがないように映り、壮烈な「国民革命」及び革命の指導者たちに対して根本的に否定的かつ悲観的な見方を示しているのである。

後に仲間からも激しい反論を招いた有名な「広州事情」(1927.1)にも、革命的ムードの高まりを喜ぶと同時に、政治、教育、農工階級の現状から判断して、「国民革命」にはまだ多くの問題が存在しており、今は決して手放して喜ぶべき時ではないと警鐘を鳴らしている。「在方向転換的途中」(1927.3)では、革命の中心は大衆であるべきで、英雄主義(個人独裁)を防がなければならないと、歴史の悲劇の繰り返しを危惧している。

1927年4月、北伐戦争の中、蒋介石は武力を用いて、ともに北洋軍閥と戦っている共産党勢力への弾圧に踏み切った。郁達夫は蒋介石の行為に大きなショックを受け、その独裁者の本質を見抜いている。4月22日の日記で、彼は次のような決意を述べている。

蒋介石は意外にも左派と決裂して、南京で彼一人の政府を樹立し、李石曾、呉稚暉らが彼の力になっている。憎らしい右派よ、わが中国の国民革命を途中で止まらせてしまった。これから僕はがんばる！国のためにがんばる！僕はもう自暴自棄になんてならないよ<sup>6</sup>。

さらに、日本の『文藝戦線』で日本の読者に向けて激しい非難を繰り広げている。

中華民族は今や、一種の新しい圧迫の下にあり、その苦悶は前よりも更にひどい。今、我等は集会結社の自由を有せざるばかりでなく、言論の自由さへも、彼等新軍閥に剥奪された。蒋介石の頭脳から、封建時代の思想が除かれず、今度の中華民族解放運動の成功せんとして、また失敗したのは、その責任は全く蔣にある！

蔣はいま、英国帝国主義者と日本の資本家及び支那旧日の軍閥と官僚と一気聯合して、極力高圧政策、○  
○（原文のまま、「虐殺」の略一筆者）政策を敢行してゐる。

我等は思ふに、蒋介石の如き新軍閥は昔の旧軍閥よりも更に我等の国民革命に妨害することが多い。

（郁達夫訳、下線は引用者による）<sup>7</sup>

郁達夫が時局批判を行なったこと、特に当時の最大の権力者蒋介石を名指して批判したことは非常に注目すべき点で、ある意味、危険を冒した勇氣ある行動であったとも言えよう。しかし、前にも触れたように、この一連の国民革命への批判は激しく、感情的な部分もあり、仲間も含めて、各方面から誤解や非難を招くことになって、結局、創造社離脱という結末を迎えざるを得なかったのである。

しかし、新中国建国後の長い間、郁達夫の「国民党」批判、「蒋介石」批判は、社会体制における支配的地位にある共産党にとって非常に都合な出来事としてイデオロギーの枠に嵌められ、政治色の濃厚な見解が目立っている。

その時、郁達夫は、革命集団の中の新軍閥・新官僚に反対し、「そこで彷徨っている」「革命参加者」にも反対した。彼が瞬時に中国革命に潜んだ危険を察知し、中国革命の選ぶべき正しい道を提示できたのは、彼がマルクスの革命理論を研鑽し、当時の中国革命の実際状況を分析した結果であった<sup>8</sup>。

相当長い間にわたって、上述のような見方が一種の「通説」として流通していた。その後、言い回しに変化はあったが、イデオロギーの立場から郁達夫の発言と行動を解釈するパターンは依然として変わっておらず、明らかに無理な解釈が存在していると言えよう。

特に1927、28年に集中して発表した郁達夫の関係論文

「広州事情」（1927.1）、「無産階級専政和无産階級の文学」（1927.2）、「在方向轉換的途中」（1927.3）、「『鴨緑江上』読後感」（1927.3）、「公開状答日本山口君」（1927.4）、「訴諸日本無産階級文芸界同志」（1927.6）と「誰は我們的同伴者」（1927.9）などを吟味してみると、これまで見落とされてきた重要なポイントを考えさせられた。

第一に、郁達夫の「蒋介石批判」「国民党権批判」は、根本的に「国民革命」そのものを否定するものではなく、その批判の矛先を明確に蒋介石を中心とした「国民革命」の支配勢力に向けている。「広州事情」では、「もし中華民族が進歩した証拠を求めたいなら、広東を見ていくと、すぐ分かるだろう」と、「国民革命」が中華民族の進歩をもたらしたことをはっきり言い切っている。

第二に、それにもかかわらず、郁達夫から見れば、国民革命には、特に革命指導者集団には、たいへん「畸形な過渡期の現象」が存在している。「この国民政府で政治的な大局を左右しているのは、ただ数人しかいない。民衆とまったく無関係の前世紀の数人の偉い人しかいない<sup>9</sup>」と、暗に蒋介石らの「封建的時代から残された英雄主義」や「独裁の高圧政策」<sup>10</sup>を痛烈に揶揄している。この部分は、過激で感情的に批判しすぎた箇所があり、周知のように、「国民革命」の参加者支持者から反論や非難を浴びた所以である。

第三に、最も大事なことは、郁達夫の「国民党批判」はどこに由来しているかということであろう。郁達夫の言論を検証してみると、彼の行動が主に「党派政治」やイデオロギーから生じたものではなく、まさに自らの理想を掲げ、現在の権力勢力、社会的政治運営における問題点をえぐり出すという社会的批判者たる論客としての位置づけ及び使命感に由来しているように思う。彼自らの次の言葉にはこの点が十分示されている。

理想や欲望は実際の進歩よりはるかに先を進む。そこで、文化批評家、政治批評家はその理想と現実とを比較検討してみなければならない。それが社会の進歩と極めて大きな関係を持つのである<sup>11</sup>。（鈴木正夫訳）

そういう意味で、郁達夫の言動は、「鮮明な政治的立場と素朴な革命的感情」によるものという一言で片付けられるものではなく、彼の蒋介石認識についても、「彼自らのマルクスレーニン主義理論への懸命な研究のほか、また、彼が（共産）党員作家蔣光慈らと友誼を結んだこと、特に魯迅から激励や影響を受けたことと関係している」<sup>12</sup>とい

たことが本当に成立するのかわきざざるを得ない。

ちなみに、新中国樹立直後の1950年、即ち後の支配的政治的な思考様式がまだ完全に形成されていない時代、文学史研究者の丁易（1913-1954）は、1927年における郁達夫の「蒋介石批判」について、「彼（郁達夫一筆者）のこの（蒋介石らの国民党右派に対しての一筆者）憎悪の感情は本当のものだが、階級の観点から発したものではなく、愛国主義から発したものなのだ」<sup>13</sup>と、興味深いコメントをしている。この長らく注目されてこなかった一言は何と大いに玩味に値する言葉だろうと強く感じる。

第四に、郁達夫の批判には、行き過ぎた傾向があるという事は、一般的に認められている。そういう意味で、当時「国民革命」に身を投じた郭沫若や成仿吾らの反論反発にもそれなりの合理性があることも否めないであろう。裏返して言えば、当時の革命に対して、郁達夫の認識と把握には不十分な点も偏った点も存在しており、革命の歴史的意義に対する理解が足りないということは否定できないのである。この点については、現代の一部の過剰解釈・過剰評価よりも、郁達夫の同時代人の見解のほうがより郁達夫の実際に近く、説得力を有していると思われる。

要するに、達夫の思想には人を魅了する輝きがまったくないというわけではない。その薄暗い世界で、我々は常に彼の思想の起伏する衝動を目にすることができ、しかし、彼は終始その世界を抜け出せないでいる。なぜなら、彼は社会全体を見抜く能力を欠いており、思想的に社会において欠陥を生じる、根本的な病因を突き止めることが出来なかったのである。そのため、最終的に本能的主観的解決法を求めることしか出来なかったと、我々は考えている<sup>14</sup>。

（下線は引用者による）

### 3 「プロレタリア文学」への共感と発進

郁達夫の「左翼化」のもう一つの表れは、プロレタリア文学への強い共感及び自らの提唱にあった。1920年代後半から、ロシア、そして特に近隣日本におけるプロレタリア文学運動から大きな影響を受け、中国でもプロレタリア文学運動が盛んになった。郁達夫も早くから社会主義理論、プロレタリア文学理論に触れ、中国社会にある様々な問題点から、その不合理な社会現状を打破し、革命を主張するところに強い共感を生じた。

この時期の郁達夫の言論を見てみると、当時盛んに行な

われたプロレタリア文学運動に乗じて、社会的状況や国民党政治への批判、人類の大同、民衆の幸福を実現する共産主義思想に共鳴を覚えているように見える。彼は、まるで共産主義者のように「無産階級」の闘争、「無産階級の文学」を高らかに唱え、この西洋から来た新しい思想に新たな希望を見出したように喜んでいる。こうした心情と意識は彼の一連の論文「無産階級専政和无産階級の文学」（1927.2）、「『鴨緑江上』読後感」（1927.3）、「公開状答日本山口君」（1927.4）、「農民文芸的提唱」（1927.9）「農民文芸的実質」（1927.9）などに明確に示されている。

彼は当時の「革命文学」即ち「プロレタリア文学」の有力な提唱者蔣光慈の作品集『鴨緑江上』（1927.1重東図書館）を取り上げ、「現在の中国の国民革命は、世界革命の一部、無産階級が支配権を求め、解放を望む革命なので、我々が現在求めている革命文学は当然ながら無産階級の文学なのだ」、「今の中国の無産階級に同情する文学については、我々はその同情が真のものかどうか、その無産階級の階級意識を確実に捉え、表現しているかどうかという一点を問いたいのだ」、「もちろん、中国の新文学の中には、この要求に合致する作品が現にあまり出ていない。しかし、その数少ない作品の中でも、蔣光慈が著した短編小説集『鴨緑江上』は非常に重要な地位を占めていると思う」<sup>15</sup>と、高い評価を与えると同時に、プロレタリア文学の宣伝も強く意識している。

創造社離脱直後、郁達夫は北京から上海に移住した魯迅及びその周辺の文学者グループに近づき、様々な左翼文学活動にも参加し、かつてないほどの元気あふれる健闘ぶりを見せつけた。1927年9月、主要メンバーとして、政治評論を中心とした雑誌『民衆』の発刊に尽力し、主筆も務めた。彼自ら書いた「『民衆』発刊詞」において、現在の中国では、民衆がもはや完全不在の状態になっていると、危機感をあらわにし、自分たちの雑誌の使命が「民衆を目覚めさせ、民衆の地位を向上させ、民衆革命を成功させる」<sup>16</sup>ことにあると宣言している。さらに同じ創刊号に発表した「誰は我們的同伴者？」という論文では、共産党勢力への武力鎮圧と、国民が参政・言論・出版・集会・結社の自由を奪われたことを挙げ、独裁政治、独裁者と戦おうと、再び呼びかけている。また、農民階級が中国革命の主力であるべきだという認識に基づいて、「農民文芸的実質」「農民文芸的提唱」を相次いで発表し、農民の生活、意識を表現する「農民文学」を強く主張し始める。こうした彼の文学意識の変化は明らかに当時の彼の政治意識と連

動していると言えよう。

1927年10月、郁達夫は、広州の中山大学教授を辞め上海に向い、職業作家としての生活を始めた魯迅と再会し、もともと親密だった関係をさらに深めていく。魯迅との再会によって一段と勇気付けられたためか、この時期の郁達夫は政局、政府、各種の社会現象に向けて次々と大胆な発言をし、政治的な色彩を帯びた文芸界の活動に対しても熱心で積極的な姿勢を見せていた。彼自身も社会的現実、政府、多くの政治家に対し強い不満ないし反感を抱いていたため、今の社会現状を変え、すべての民衆を平等、自由と幸福へと導くという点で、共産主義の理想を掲げ、現実の社会体制に反対する左翼勢力に共感を覚え、實際上彼らと歩調を合わせることもあった。魯迅と一緒に共産党が関係する「中国済難会」に入会、自分の原稿料を最も「過激的」な左翼文学結社「太陽社」に寄付し、自らも「太陽社」のメンバーになり、彼らへの支持を実際の行動で示した。1928年になって、魯迅らと月刊誌『奔流』を発刊した他、月刊誌『大衆文藝』も創刊し、自分たちの「文芸は大衆のもので、文芸は大衆のためのもの、文芸は大衆についてのものでなければならない」<sup>17</sup> という主張を少しでも実践しようとした。同時期に、「中国済難会」の総合雑誌『白華』半月刊の編集にも加わり、その創刊号に『『白華』的出現』を發表し、国民革命や国民政府に対して、「ところが、革命が成功した現在、我々民衆は何を得たのか、その第一は各労働組合の解散、第二は、民衆運動の禁止、第三は、各地の学生会の閉鎖、第四は、……第五は、……同様の良いことが数え切れないほどだ」、「革命が成功したと言って、民衆を捨てても良いのか？政治が政府の中の数人に独断でやられても良いのか？」<sup>18</sup> と、厳しい注文をつけ、『白華』が「革命を促進する」力となるべきだという期待をあらわにしている。ちなみに、郁達夫と雑誌『奔流』、『大衆文藝』及び『白華』については、鈴木正夫『『奔流』、『大衆文藝』編集時代——魯迅との交渉を中心に』（1994.7研文出版『郁達夫——悲劇の時代作家』所収）が極めて丹念かつ詳細な考察を行っており、ぜひ参照されたい。

一方、この頃、政府当局は左翼文学者への監視や弾圧を日増しに強めていた。民国17年（1928）5月14日に公布された『国民政府著作権法』では、著作物出版の際は、政府の「内政部」で事前登録をし、許可をもらわなければならないことになっていた。ただし、次の場合は登録を断ることがあるとして、「一、著しく党義に反するもの、二、他の法律によって発行を禁止されるもの」<sup>19</sup> と定められていた。民国19年（1930）12月16日に公布された『国民政府出

版法』は次の出版物を禁ずると明記している。

第十九条 下記に挙げる出版物の出版はこれを禁止する。

- 一 中国国民党あるいは三民主義の破壊を図るもの。
  - 二 国民政府の顛覆を図る、もしくは中華民国の利益を損害するもの。
  - 三 公共秩序の破壊を図るもの。
- ……………<sup>20</sup>

上記の二つの法律の他、民国18年（1929）1月10日国民党第二回中央執行委員会第190次常務会議で可決された『国民党中宣部宣伝品審査条例』では、特に共産主義思想や反政府勢力の拡大を封じ込めるために、新聞出版への規制を一層厳しくするようになった。それによれば、次の要素を含む宣伝品を「反動宣伝品」と指定している。「一、共産主義及び階級闘争を宣伝するもの、二、国家主義、無政府主義及び他の主義を宣伝し、本党（国民党を指す一筆者）の主義、政綱、政策及び決議案を攻撃するもの、三、本党の主義、政綱、政策及び決議案に反対もしくは違反するもの、四、本党を離間したり分裂させたりすることを図るもの、五、流言を流布し人をだますもの」。「反動宣伝品」の「処理法」については、「発禁、閉鎖及び法律による処罰」<sup>21</sup> を課すと定めている。現実には、政府当局は左翼文学を標的として取締りを厳しく行うようになる。1929年2月、「革命文学」提唱の先頭に立った「創造社」は政府によって閉鎖された。とは言え、1928、29年頃は、プロレタリア文学運動が一つの頂点に達した時期である。同年の文壇時評には、こうした時代の流れをはっきりと示す記事が掲載されている。

1929年の中国文壇では、二つの相反する現象が明確に現われている。その一つは、有産者文壇が1928年よりさらに動揺していること、二つ目は、プロレタリア文壇はさらに強固なものになったことである。

一年の苦闘及び各種の客観的な条件の成熟を経て、その存在権を獲得したプロレタリア文壇は、この一年に、環境の厳しさにより、表面上は大きな発展がないように見えたが、その力はすでに各方面に及んでいる——有産者文壇でさえその影響を免れなかった。

我々是有産者文壇の雑誌を開くと、プロレタリア文芸関係の論文及び創作の翻訳紹介が必ず目に入って

る。中国のプロレタリア文芸作品を載せたものもある。その動機が雑誌の販売の促進にあるか、それとも覚醒後の方向転換なのかということは別として、彼らがプロレタリア文芸を絶対否定できないことは、すでに明らかである。

この一年、たとえ極めて保守的な書店ないし反動的な書店でも、プロレタリア文芸の売れ行き的好調さに惹きつけられ、プロレタリア文芸の書籍を発行することになった<sup>22</sup>。

こうした状況は国民党政府サイドから発せられた悲鳴にもよく現われている。1928年6月、国民党改革派による『革命評論』（1928.5.7～同9.11、1～18号）<sup>23</sup> 週刊が発刊された。週刊は汪精衛をはじめとした国民党改革派の主張を伝えており、いわゆる左に対して「共産主義化」に反対し、右に対して国民党の「腐敗」に反対する立場を取っていた。即ち蒋介石の方針と共産主義の双方を否定し、1924年の国民党の「改革精神」を取り戻そうという目標をしたものであった。『革命評論』では、国民党側の人であっても文芸の分野においては共産主義に勢いがあり、国民党の不振とその主張不在の寂しい現実をしぶしぶしながらも認めている。「しかし、我々国民党治下の中華民国においては、文芸に対する扱いは一体どうだったのだろうか？現在の上海文芸界の状況を見てみると、それは明らかである。その理由の一つは上海が首都に近いことであり、いま一つは全国の文芸雑誌は上海の各文芸団体によって刊行されていることである。上海文芸は概ね共産派、無政府派と保守派に分かれるが、我が党の文芸雑誌になると、まさに寥寥たるものである」<sup>24</sup>。

文学界における革命文学運動に共鳴し、心情的にも行動的にも革命文学勢力に歩調をあわせて発言し現実的な活動に参加した郁達夫は、この時期、政治的イデオロギーの色彩さえ帯びるようになった。特に次々と蒋介石政権の共産党弾圧を激しく糾弾したことは、政府当局の注意を招き始めた。1928年11月頃、国民党政府当局が郁達夫を逮捕しようとしているという噂が広まったため、郁達夫はしばらく上海を離れた。1929年秋、郁達夫は教授として安徽大学（かつて勤めた元安徽法制専門学校）から招聘され赴任したが、「赤化分子」リストに入れられていることを知り、即座に上海に戻った。

この時、郁達夫はすでに政府からの圧力ないし身の危険を少し感じ始めるが、まだそれほど緊迫した状況にはなっておらず、彼もそれほど恐れてはいなかった。翌1930年2

月、魯迅、柔石（1902～31）らとともに発起人となり、言論、出版、結社、集会の自由の実現を目指し、国民党の独裁政治に反対する「中国自由運動大同盟」という政治的文化的団体を結成し、「中国自由運動大同盟宣言」を発表した。「現在の統治下にあっては、我々に自由といえるものはまったくない！……我々は自由運動大同盟を結成し、自由のために勇敢に戦う。不自由を感じ取った人々よ、団結せよ、自由大同盟の旗の下に集まり、一緒に奮闘せよ！」と宣言している。ちなみに、同盟は当初から政府からの弾圧を受け、まもなく活動停止を余儀なくされた<sup>25</sup>。

前述のように、20年代後半から、共産党と緊密に関わった左翼文学勢力はますます勢いを増し、1930年2月にはついにプロレタリア文学のスローガンの下に左翼文化運動を統合し、最大の組織として「中国左翼作家連盟」（略称左連）を結成する。連盟は1935年の解散まで、国民党政府の直接あるいは間接的弾圧を受けながらも、左翼文学の力強い勢いを発揮し、思想文化界・文学界を席卷した。郁達夫も「左連」に参加し、魯迅らとともに「左連」の発起人に名を連ねている。この一連の活動によって、郁達夫はますます政府に嫌われ、1930年3月には国民党浙江省党部から警告を受けたこともあるという。

要するに、1920年代後半のかなり長い間、郁達夫は左翼文学という強烈な時代の流れに吸い込まれ、自らもそれを時代の斬新な潮流として認め、それに積極的に身を投じた。しかし、彼にとって、プロレタリア文学の価値はその政治性・イデオロギー性よりも、その時代的潮流としての新しさにあり、プロレタリア文学への情熱は政治的選択・イデオロギー選択を意味するのではなく、「新」という価値を追求し、「新」をもって過去のもの、社会の現状を打破しようとする意味を持っていたのである。そのため、プロレタリア文学に対する態度によって、郁達夫らの行動を批判し、左かそれとも右かに分けることには、筆者は大きな疑念を感じている<sup>26</sup>。

#### 4 同時代から見た郁達夫の「左翼化」

郁達夫は空前の「無産階級革命」ブームに共感を持ち、当時の社会体制に密接に関連した混沌とした社会状態に不満を抱き、かつてない「闘士」の姿勢を示したが、実際には苦しい立場に追い込まれる側面も存在した。彼はその「反政府」「反国民党」的姿勢によって、政府当局から警告を受けたりする一方、彼よりもっと急進的「革命的」な左翼グループから理解されず厳しい非難を蒙った。

剛果倫「一九二九年中国文壇的回顧」(1929.12『現代小説』3巻3期)は、郁達夫にも触れて、「郁達夫が我々にくれたのは、ただプロレタリア文芸陣営離脱後の一貫した不平だけだった」<sup>27</sup>と、郁達夫をプロレタリア革命精神に欠ける「頹廢的」なタイプに帰している。その他、創造社の後輩でもある新進メンバーからの非難や批判は特に激しかった。早くから創造社に入った主要メンバーの王独清(1898～1940)は、創造社が閉鎖された翌年、創造社のことについて次のように語っている。郁達夫については、「まず、我々は郁達夫がとくに死んだに等しいことを認めなければならない」と断定している。大きな反響を引き起こした郁達夫「広州事情」の蒋介石批判に対しても、「当時の状況について言うと、郁達夫が反対したのはまさに広東にある、政治的に右傾化後の政府であった。……上海に戻った郁達夫はただ自分の直感に頼ってそれを書いたのだろう。もちろん、それを根拠として郁達夫が何らかの政治的主張を持っていたということはまったくのでたらめだ。なぜならば、郁達夫は政治が毛頭分らないからだ」<sup>28</sup>と述べており、郁達夫の政府批判が明確な意識に基づいたものではないという認識を示している。

王独清の見解は、そのまま受け入れられるものではないが、郁達夫の当時の社会に対する態度、政治的な立場を正確に把握するためには、ともに長く創造社の活動に携わった仲間の証言として、それなりに示唆的な点があると考えられる。

1927年12月、成仿吾は、「洪水終刊感言」で雑誌『洪水』を中心に展開された創造社の革命文芸を主張する活動を総括する際、「当時、我々の意識はまだ不明瞭で、初期には空っぽな叫びしか発しなかった。それは時代にも関係している。当時はまだ国民革命の前夜で、情熱や意欲は大いにあるが、問題を確実に把握する力を有していなかった」<sup>29</sup>と反省の色をにじませた文章を書いている。成仿吾のこの認識はむしろ郁達夫にも当てはまると考えられる。中国近代文学研究者王富仁によると、当時の左翼文学には、コミンテルンの直接指導を受ける作家、中国共産党の直接指導を受ける作家、革命運動家及び創造社の若手文学者という四種類があった。その中で、創造社の若手文学者はマルクス主義の信念、意識より、マルクス主義の言葉のみを使い、それを武器に気に入らないものを攻撃したという<sup>30</sup>。この点では、マルクス主義的な言葉を積極的に使おうとした郁達夫も同様である。

前述のように、郁達夫は、20年代後半から、まず言論の面で、当時の社会、政治との関わりが急速に緊密になった。

彼は中国の社会状況、特に蒋介石の国民党政府の「暴挙」に本能的に嫌悪の情を持っただけではなく、自分の気持ちを明瞭な表現を用い素直に表現したのは彼の誠実さと正義感でもあると言えよう。一方、彼が盛んに持ち出した「プロレタリア文学」や「プロレタリア革命」の論調は、当時の革命ブーム、時代雰囲気の影響であり、その中にある「革命」という「発想」——力で古い世界を打ち壊し、理想的世界を創ろう——が当時の彼の気持ちと合致していたことも看過できない。つまり、郁達夫の書いたものには、「無産階級革命」「革命」「社会主義」「階級闘争」「民衆」「無産階級文学」というような用語があふれているが、しかし、本質的に、彼は左翼革命者へと転身したわけではないと考えられる。彼はかなり感情的な「文人」としての純真さを持っており、王独清の「郁達夫は政治が毛頭分らない」という言葉の本意は別にして、その指摘は大まかには当たっているだろう。結局、郁達夫は終始苦しい立場に立たされた。国家政権への批判、政府が懸命に抑えようとする「共産主義」への共感によって、しばしば「危険分子」と見なされる一方、彼が一時期、一所懸命に革命の言葉を発しているのに、常に同じ創造社の後輩たちからは「時代遅れ」「没落した文人」と揶揄されたのである。

かつてないほど「無産階級革命」や「労働者の文学」「革命文学」を懸命に叫び主張した郁達夫がなぜ批判されたかは非常に興味深い。そこからは、様々なことを見出すことができる。郁達夫は明らかに文学者の感覚、自分の感情に忠実に従った形で「プロレタリア革命」、「革命文学」を受け止め、それに対して自分の声を発している。彼は自由奔放に発言・行動していたことで、かえって次第に左翼文学勢力から疎外されてしまう。結局、郁達夫の革命への憧れは明らかに彼の感情に富んだ気質、劇的な形で閉塞した社会現状を打破しようという情緒的な気質に関わっていた。それと同時に、彼の「革命」もいわゆる情緒的な部分が多い。いくら「革命」「無産階級」と叫んでも、あくまでも芸術的な叫び、文学者の芸術的表現そのものであったのである。この意味で、彼をよく知った王独清の見方は単に郁達夫への皮肉ではなく、むしろ彼の感性的・感情的・非政治的という本質を見抜いた発言であったと言っても良いだろう。

革命文学との間には、このような本質的な相違が存在したため、郁達夫は最終的にそれと合流することなく、左翼文学革命の最盛期が過ぎ去ってしまうと、彼も静かになって再び前の状態に戻ってしまった。さらには革命文学の中心地上海を離れて、杭州へ引っ越し、優雅な作家生活を楽

しむようになったのである。

### おわりに

1920年代後半における郁達夫の左翼化は、一つの事実としてあまり異論はないだろうが、以上検討してきたように、その内実については大いに考えるべき余地がある。

この国民革命時期こそは、おそらく郁達夫の生涯の中で最も国家、社会、革命、時局に対して関心を示し、責任感、正義感をおもてに出した時期であろう。彼は革命がすべての民衆を幸せにしなければならないという素朴な理想を抱いていたことで、当時の社会的現実と違和感を覚え、それを痛烈に批判するとともに、また、左翼文学者たちの共産主義的観念からも感銘を受け、それをある程度受け入れ、その理念を自分なりの形で主張してきた。

郁達夫のそうした言動は、当時共産党指導下にあった左翼文学者、革命文学者と表面的には同じように見えるかもしれないが、実のところ、かなり違う部分もあるように思われる。彼の場合、やはり時代の大きな流れに巻き込まれた部分があり、一時的に共産主義にある種の親近感を表わしたとしても、それを特定の信仰・信念と呼ぶことはできない。それは、正直な文学者の正義感、批判意識に基づいたある政治勢力、ある社会体制に対する批判、つまり広い意味での一種の社会批評・政治批評であった。それをマルクス主義信仰と結び付けたり、彼の国民党批判を「進歩的」「革命的」という基準で判断したりすることは、あまりにもイデオロギー化しすぎなのではないだろうか。やはり、この時期の郁達夫は、文学者としての姿と、権力への懐疑者、批判者、政治に情熱を燃やす論客としての姿が矛盾しながらも重なりあっていったように思われる。

本稿でこうした考えを整理する過程で、中国人研究者の研究のみならず、日本人の研究にもできる限り目を通すように努めた。その中で、中国文学研究者竹内好（1910—1977）の1930年代に書かれた郁達夫をテーマにした卒業論文に目を奪われた。竹内好自身がことわっているように、その論文は当時の中国人の研究に頼った部分があるが、注目に値する作者の鋭い、独自の見識が光る箇所も確かに存在する。竹内好の見解は、直接本稿の課題に関するものではないが、大きなヒントを与えてくれると感じている。ここでそれを抄録して本稿を終えたい。

彼の軍閥憎悪は殆ど本能的であった。それは換言すると、理性的に理論的認識から来るものというよりむ

しろ自己の自由を奪い、生活を脅かすものへの感情的嫌悪であった。

彼の所謂革命も、現実の国民革命の歴史的認識の結果ではなくて、単に自己の頭脳に描き出された理想形態に外ならぬのである。過去に於て彼は自己の苦悶を本能的に訴えることによって、囚らずも封建的桎梏に苦しむ中国青年の同情を克ちえたのであるが、それと同様、かかる政治的見解の発表も、彼の努力がとに角新しい時代へ自己を適応せしめようとする方向に向かっているものと考えることが出来よう<sup>31</sup>。

### 注

- 1 本稿作成にあたっては、横浜市立大学名誉教授現関東学院大学教授鈴木正夫先生と九州大学大学院比較社会文化研究院准教授秋吉收先生から、たいへん示唆的なご意見をいただいたことに、心より感謝を申し上げる。本稿の修正過程では、両先生のご意見を取り入れつつ、作業に努めた。初稿作成の際、テキストとしては、主に1980年代中期に出版された『郁達夫文集』（三聯書店香港分店・花城出版社海外版）を使用したが、今回は、2007年11月に出された最新版『郁達夫全集』（浙江大学出版社）を入手し、すべてのテキストに対して、確認作業を行ったことをことわっておきたい。なお、訳文は、特に断りがない場合は拙訳によるものである。
- 2 中国国内における先行研究では、各種の概説書や論文がこの問題に触れているが、もっぱらそれを取り上げるものは少なく、しかも主に1980年代に集中している。複数の『中国現代文学史』や郁達夫に関する伝記のほか、曾華鵬、范伯群「郁達夫論」（『人民文学』1957年5、6月合併号）、朱靖華「一個充滿矛盾而易遭誤解的作家——略論郁達夫」（『中国現代文学研究叢刊』1980年第1期）、劉納「郁達夫——我国新文学的開拓者」（『光明日報』1985年9月5日）などが挙げられる。現時点では、この課題をめぐる、日本の郁達夫研究者鈴木正夫による論考が最も詳細でかつ充実していると思われる。氏の研究書『郁達夫——悲劇の時代作家』（1994研文出版）に収録された「創造社離脱前後」、「『奔流』『大衆文芸』編集時代」では、関係の諸問題が詳しい論考で裏付けられている。本論文の作成にあ



- たって、筆者も氏の研究から示唆を受けた。
- 3 これまで出版された各種の中国現代史の中から、特に新しい研究成果を取り入れた魏宏運主編『中国現代史』(2002.1高等教育出版社)を参考にした。
  - 4 郁達夫『『鶏脇集』題辞』(1927北新書局『達夫全集』第2巻『鶏脇集』)、引用は『郁達夫全集』第10巻302頁による。
  - 5 「無産階級専政和无産階級の文学」、1927.2『洪水』3巻26期。
  - 6 「閑情日記」(1927.9北新書局『日記九種』)、引用は『郁達夫全集』第5巻156頁による。
  - 7 「日本の無産階級文芸界同志に訴ふ」、1927.6『文藝戦線』4巻6号。
  - 8 郁雲『郁達夫伝』、福建人民出版社、1984年4月、84頁。
  - 9 郁達夫「広州事情」、1927.1『洪水』3巻25期。
  - 10 郁達夫「在方向轉換的途中」(1927.3『洪水』3巻29期)、引用は『郁達夫全集』第8巻26、27頁による。
  - 11 郁達夫「広州事情」。日本語訳は鈴木正夫訳による。鈴木正夫『郁達夫——悲劇の時代作家』21-22頁参照。
  - 12 朱靖華「一個充滿矛盾而易遭誤解的作家——略論郁達夫」、『中国現代文学研究叢刊』1980年第1期。
  - 13 丁易『『郁達夫選集』序』、『郁達夫選集』(1951[北京]開明書店)
  - 14 秀子「郁達夫の思想和作品」(1936.3.10『福建民報・小園林』)、『郁達夫研究資料』(下)(1982年12月天津人民出版社)410~411頁。
  - 15 「『鴨緑江上』読後感」、1927.3『洪水』3巻29期。
  - 16 「『民衆』発刊詞」(1927年9月『民衆』旬刊創刊号)、引用は『郁達夫全集』第10巻354頁による。
  - 17 「『大衆文藝』積名」(1928.9『大衆文藝』第1期)、引用は『郁達夫全集』第10巻449頁による。
  - 18 1928.10『白華』第1巻第1期、引用は『郁達夫全集』第8巻40頁による。
  - 19 『国民著作権法』(1928.5.14)「第二章 著作権之所属及限制」、引用は宋原放主編『中国出版史料』第1巻下冊(2001.4山東教育出版社)567頁による。
  - 20 『国民政府出版法』(1930.12.16)「第四章 出版品登載事項之限制」、引用は宋原放主編『中国出版史料』第1巻下冊(2001.4山東教育出版社)573頁による。
  - 21 『国民党中宣部宣伝品審査条例』(1929.1.10)、引用は宋原放主編『中国出版史料』第1巻下冊(2001.4山東教育出版社)578頁による。
  - 22 剛果倫「一九二九年中国文壇的回顧」(1929.12『現代小説』3巻3期)、引用は中国社会科学院文学研究所現代文学研究室編『“革命文学”論争資料選編』(下)(1981.1人民文学出版社)880頁による。
  - 23 葉再生『中国近現代出版通史』第2巻(1991.8上海人民出版社)1114-1115頁参照。
  - 24 廖平「国民党不應該有文芸政策嗎?」(1928.8『革命評論』週刊16期)、引用は中国社会科学院文学研究所現代文学研究室編『“革命文学”論争資料選編』(下)(1981.1人民文学出版社)1164頁による。
  - 25 「中国自由運動大同盟宣言」(1930.5.12『駱駝草』週刊第1期)の引用は『郁達夫研究資料』(下)(1982年12月天津人民出版社)699頁による。
  - 26 中国では、こうした問題に着目した研究が現われ始めている。曠新年『1928革命文学』(1998山東教育出版社)、馬睿「左翼文学の生産方式与意識形態——關於1930年前後上海的文学景觀」(『文芸理論与批評』2001年第6期)など参照。
  - 27 引用は中国社会科学院文学研究所現代文学研究室編『“革命文学”論争資料選編』(下)(1981.1人民文学出版社)881頁による。
  - 28 王独清「創造社——我和它的始終与它底総帳」(1930.12『展開』半月刊1巻3期)、引用は『創造社資料』(下)(1985年1月福建人民出版社)673、675頁による。
  - 29 成仿吾「洪水終刊感言」、1927.12『洪水』第3巻第36期。
  - 30 易崇輝整理「中国左翼文学国際學術研討会総述」、『文学評論』2006年第2期。
  - 31 竹内好「東京帝国大学文学部支那文学科卒業論文 郁達夫研究」、『竹内好全集』第17巻(1982筑摩書房)149、152頁。

